

第二幕

明治四十四年（一九一）の秋の夜。

ニューヨーク、レキシントン街の小さな食堂。

閉店間際とて客はテーブル席の二人のみ。

それぞれ英字新聞や本など読んでいる奥住と荒木紀男
（二五）。

別の席に疲れた顔の女給仕が座っている。

奥住、新聞から顔を上げ……客席に語り始める。

奥住

文字通りの徒手空拳でアメリカに渡った野口さんは、伝研時代にわずかに一面識あったのみのサイモン・フレクスナー教授の元で押しかけ助手となりました。やがてその猛烈な仕事ぶりで徐々に頭角を現し、ニューヨークに新設されたばかりのロックフェラー医学研究所に移られると、渡米以来十二年にして遂に梅毒病原体の純粋培養成功という

輝かしい成果を打ち立てます。時に明治四十四年、野口博士三十六歳の頃のことです。（隣を見込み）こちらの青年は荒木紀男君。血脇先生の東京齒科医学院の出身、つまりわたしの後輩で、齒科技工修行中のアメリカでこの頃の野口博士と三年間同居したという人物です。

荒木、本を閉じて辺りを見回す。

荒木　とうとう客はわたしただけになってしまいましたね。

奥住　ウム。（ところかも新聞をたたみ）……確かに七時と言ったのだね？

荒木　ええ。今日は早く帰るからと。

奥住　（時計を見て）しかしもう九時前だぜ。例によつて研究に没頭し過ぎて時間を忘れてるのじゃないかね。

荒木　仕事の方は一昨日で一区切りが付いてらっしゃるはずなのです。これではばらくは人並みに寝巻を着てベッドに入ることが出来るよとおっしゃっていましたから。

奥住　フフ、相変わらずの二十四時間不眠主義だね。

荒木　ええ。あれには本当に驚きます。先生は天才か狂人のどちらかだと日

本ではよくそう聞かされたものでしたが、こうして起居を共にさせていただいて実にその両方が真実だとの感を強くしました。アパートメントに帰られてからも本当にぶっ続けでお仕事をされるのです。眠るにしても靴も脱がずにほんの一時間か二時間横になるだけなのですから。

奥住　フフ、目に浮かぶな。あの人は昔からそんなふうだったよ。

荒木　そのうえ実験一つにしても動物の組織を乳鉢で磨り潰すとか、試験管を洗うとか、下働きの助手にでもやらせたらと思うような些細なことですべて御自身でおやりになるのですからね。それぐらいのことならこの荒木にもお手伝い出来ますからといくら申し上げても、イヤ人に任せて間違いがあつては困るからおっしゃって。あれでは眠る時間が無くなるのも道理ですよ。

奥住　だがそのような超人的努力と忍耐の上にこそ野口さんの真骨頂があるというのもまた事実だからね。それが無ければ梅毒の純粹培養などという世界的偉業は達成されなかったかも知れない。

荒木　それは無論そうなのですが。

奥住　それにしてもボクは感激するのだよ。昨年ドイツで秦佐八郎さんがエ

ールリツヒ博士と共同で梅毒の治療薬サルバルサンを発明した。と思う間もなく今度はアメリカで野口さんが梅毒病原体の純粹培養に成功された。今世界の医学界はこの二人の日本人の輝かしい研究成果に括目している。ボクはそのお二人が愛宕下の伝研で助手見習いをしていた頃から知っているのだからなあ。

それはさぞやの御感慨がおりでしょうね。羨ましい限りです。

(女給仕に) ちよつときみ。珈琲のお替りをくれたまえ。

女給仕、無言で立つて行く。

奥住 それはそれとして一つ屋根の下じゃきみもさうとう泣かされたろう、野口さんの借金癖には。

荒木 ええ、ひと頃はずいぶんやられました。昨日は五ドル今日は十ドルと御用立てするうちにお繰り替えも相当な額となつてしまひました。さすがに最後には堪りかねて苦情を申し上げました。

奥住 ほほう、崇拜者のきみにしては思い切つたね。それで返してくれたがい。

荒木 ええ。今は毎月の給料日に研究所の方へ出向いて決まった額の御返済を頂いております。

奥住 何だ、きみも存外しつかり者なんだな。

荒木 なに当の先生がその様にしてくれとおっしゃったのです。金というのはいったん自分の懐に入ってしまうと知らぬうちに消えてしまうのだから、その前にキミ好きだけ取って行つてくれと。

奥住 そうか。フッフ、十二年経つてもその辺は相変わらずとみえるなあ。

女給仕、面倒くさそうに珈琲を持ってくる。

荒木 ありがとう。

女給仕 言つとくけどあと七分で閉店よ。

奥住 吾々は人を待っているのです。

女給仕 (愛想なく) オーケー。でもその人が来ても来なくてもあと七分で閉店だから。

女給仕、去る。

荒木 どうもひどく突つ慥貪な女給ですね。

奥住 まあ日露戦争からこつち日本人は一段と嫌われてるからね。

荒木 例の黄禍論ですか。ワスプの連中はそんなに吾々を劣等民族だと見下していたのでしょうか。

奥住 理屈ではなく多分に生理的な嫌悪さ。下等だと信じていた日本人が開国以来まさか僅々数十年にしてこれほど国際社会に伸してくると思つてもいなかったのだろう。向こうにしてみりゃそりゃあ面白からうはずがない。しかしそんな逆風の中でも堂々と米国人に伍して今やロックフェラー研究所の花形学者となつたのだから、やはり野口さんは偉い人だよ。

奥住 まつたくです。先生は吾々日本人全員の誇りですよ。

と、表の通りで野口の声がする。

野口 (声のみ) いいかキミ、オレがロックフェラーの野口だから言うのじやない。どんな日本人に対してもそういうことを言つてはいかんと言つてゐるのだ！ わかつたか？

荒木 野口さんの声ですね。

奥住 何かあつたかな。

野口 (声のみ) よし、わかつたのならそれでいい。行きたまえ！

山高帽にステッキの堂々たる恰好で野口がせかせかと入つてくる。

野口 ヤー待たせたな^レ。

荒木 表で何があつたのです？

野口 なに、通りすがりの若い男がオレとすれ違い様に顔を背けてジャップと言つたのだ。だから捉まえてオレはロックフェラーの野口だが何か文句があるのかと言つてやつた。そしたら途端に恐れ入つて態度を改めたので、野口と聞いて謝るのでは駄目だ、どんな日本人に対してもジャップなどと言つてはいかんと説教してやつたのだ。

荒木 それは胸のすくお話です。

奥住 まるで血脇先生を見るようすなあ。

野口 (女給仕に) きみ、ウイスキーをくれたまえ。

女給仕 あと五分で閉店よ。

野口 (苛々と) わかつてるさ。いいから持つてきたまえ。

女給仕、不愛想に去る。

野口 よお、懐かしいな奥住君。一別以来か。

奥住 ペンシルバニア大学に入学を許された折に御挨拶に伺って以来ですから、かれこれ四年ぶりです。

野口 もうそんなになるか。

奥住 すっかり御無沙汰をしてしまいました。

野口 きみもいよいよ業を卒えてめでたく帰国の途に就くか。日本に帰ったら血脇先生にくれぐれもよろしく伝えてくれたまえよ。

奥住 はい、きっとお伝えしましょう。野口さん、改めましてトリポネーマ・パリズム純粹培養成功の快挙、誠におめでとうございます。ありがとうございます。

奥住 それに京都帝大より遂に医学博士の学位を受けられたそうで、併せてお慶びを申し上げます。

野口 なに、日本の学位など幾つあったところでこちらじゃ屁の突っ張りに

もならんがね、まあクニのおっかさんが喜ぶだろうから貰っておいたんだ。

奥住 お母様はお達者なのですか？

野口 ああ。オレのおっかさんは並の人間の十倍は頑丈に出来とるんだ。殺したって死なねー様な人だから。

奥住 それは祝着です。今はどんな研究を。

野口 今はリスチンというのをやってる。ツベルクリン^に倣ってオレが命名した。純粹培養したスピロヘータから作った梅毒用の検査薬だ。

奥住 するとやはりワクチンの方向に向かうのですか。

野口 無論そうだ。結核菌が発見された後に免疫ワクチンとしてツベルクリンが開発されたように、オレは梅毒にもワクチン^をを創ることは可能だと考えている。過去においてはコレラもペストもチフスも皆その様にして征服されてきたのだからなれ。

女給仕がウイスキーを置く。

野口、シヨットグラスを一息に半分飲み干す。

野口 もう一杯だ。

女給仕 あと三分で？

野口 いいから持ってくるんだ。

女給仕、憤然と去る。

野口は見向きもせずに関きを語り出す。

野口

秦さんが発明したサルバルサンは確かに梅毒治療薬として或る程度の効果は期待できる。しかしそれは所詮は症状が出てからの臨床効果^を求めた研究だ。そもそも病気には罹らんに越したことはねーでねーか。ごもつともです。

奥住

野口

だからオレはまず梅毒患者と健康な被験者の双方にリスチンを注射してみてその反応の違い^を調べたのだ。この場合リスチンの量の調整がもつとも難しい。少しでも多過ぎて健康な人間まで梅毒^を罹^らせてしまつては何にもならん。梅毒には罹らず、しかし体内にスピロヘータ^を

ある場合はそれと感作し合つて確実に反応する、その必要最小量を割り出すことがもつとも肝要となる。そこで何度も兎とマウスで実験^をを繰り返してやつとその適量を割り出した。そして遂に先週、人間の被験者にリスチンを試みてみたのだ。

奥住

野口

うん、初期と第二期の患者では無反応だったが、第三期及び遺伝性の梅毒では明瞭な反応^を引き出すことが出来たよ。

奥住

するとまず第一歩には成功されたというわけですね？

野口

そうだ。この方法を推し進めて今よりもつと鋭敏な方法^を確立すれば必ずワクチンは創れるはずだ。

荒木

奥住

同感です。そいつが完成すれば人類積年の宿願であつた梅毒の征服が遂に成されるわけですね。

野口

そうだ。それをこのロックフェラーの野口がやり遂げるのだ。そうなればオレは人類の救世主だぞ。ハハハ。

と、女給仕がウイスキーを乱暴に置いた。

女給仕

あと一分よ。

女給仕、去る。

野口

畜生、生意気な奴だ。あの女給はいつもあんなふうだ。

奥住

時に野口さん。つかぬことを申し上げますが。

野口

何だね。

奥住

野口さんもこの辺りで一度日本にお戻りになつてはいかがです？ お母様にもお会いになりたいでしょうし、ついでに奥方でも迎えられたら。

野口

馬鹿言っちゃいかんよ。細菌学血清学の世界は時間との競争だ。仕事は次から次へとある。とてもそんな暇はないよ。

奥住

しかし正式に妻を持てば、例の鬱勃たるパトスを持て余すということもなくなりましょう。長い目で見れば、結局はその方がお仕事に専心出来るではありませんか？

野口

ふん、今さら結婚はいいよ。オレはな奥住君、恋しかった唯一人の女が他の男の所へ嫁いでしまった時から一生結婚などせんと心に決めた

のだよ。

しかし。

奥住

野口 女なんてもう懲り懲りなんだ。今のオレはトリポネーマ・パリズムだけが恋人でじゅうぶんだ。

女給仕、勘定書きを置いた。

女給仕

閉店時間よ。勘定済ませて帰ってちょうだい。

野口

いちいちうるさい奴だな。よし、ならばこの店の時間を今夜はボクが買おうじゃないか。チップの他に一分につき一ドルずつ払おう。どうだ、一分一ドルだぞ！ それなら文句はあるまい。店の主人にそう言ってきたまえ！

奥住

野口さん河岸を変えましょう。

荒木

そうですね何もこの店にこだわることはないじゃありませんか。

野口

いいや、さつきからこの女給の態度が気に入らねんだ。女給風情まで日本人だと思つて馬鹿にしてやがる。（金を出して）さあ十ドルだ。これであと十分は吾々の貸切だと主人にそう言つてこい。さあ行け！

行きたまえ！

野口、攻撃的に紙幣を突き出す。

女給仕、野口を睨みつけて受け取って去る。

野口 何だあいつめ、あの目付きは。（大声で）こっちは客だぞ！

奥住と荒木、ようやく野口の情緒が不安定なことに気がつく。

奥住 ……野口さん。いささか興奮し過ぎではありませんか？

荒木 そうですよ先生、今日は少し変です。どうかなさったのですか？

野口 ……何でもねー。……少し疲れてるだけだ。

奥住 ではご無理をなさらずに今夜は戻ってお休みになされた方がよろしいでしょう。

野口 何を言う、今夜はきみの送別の宴でねーか。ハハハ、さすけね。今夜はとことん飲むべ、なあ奥住君。

奥住 （仕方なく）しかし四年前は確かバーを十八軒も連れ回されましたか

らね。もうあんなのはご勘弁願いますよ。

野口 わかったわかった。今夜は十七軒で帰る。よし飲むぞ。

野口、機嫌を直して飲み始める。

荒木 そういえば先生、今朝階下の御婦人と顔を合わせたら、ニューヨークには他にも野口という日本人がいるのかとのお尋ねでしたね。

野口 何？

奥住 どういうことだい？

荒木 今朝の新聞に野口という名前が出ていたと言うのです。

野口、再びひどく落ち着きを失くす。

野口 それはどんな記事だったのだ？ オレのことが何と出ていた？

荒木 いえ、先生のことではなくてまったく別人の野口米次郎という詩人の記事でした。

奥住 ああ。英語で詩集を出したヨネ・ノグチとかいう。野口さんは御存知

じゃありませんか？

……。

野口
奥住

野口さん？

と、野口は遂に「あゝ」という長嘆息とともに手で顔を覆ってしまふ。

荒木

先生、どうなさったのです？

野口

……諸君。実は、オレはとんだへまをやってしまったのだ。

奥住と荒木、顔を見合わす。

奥住

へまとは……いったいどのような？

野口

……。

荒木

どうか事情をお聞かせください。

野口

……恥を晒すようだが、実は一昨日の夜、イーストサイドで女と安ホテルに泊まったのだ。

奥住

売笑婦ですか。

野口

(うなづく) どうやらその時に手帳を落としたらしい。

荒木

それは大事な手帳なのですか？

野口

中にオレの名刺が入ってるのだ。

奥住

名刺？

野口

昔のオレならいざ知らず、今のニューヨークでロックフェラーの野口の名前を知らぬ人間はおるまい。品行方正たるべき立派な学者がそんないかがわしい魔窟に出入りしとつたと世間に知れてみる。たぶんオレはお終いだ。下手したら研究所に居られなくなるかも分らない。まさか。いささか心配のし過ぎではありませんか？

奥住

そうですね、たかがそんなことぐらいで。

荒木

きみらは知らんのだ。ロックフェラー会長も所長のドクター・フレキシナーもアッパークラスの人間だ。煙草はおろか酒さえ飲まねー人たちだ。そういう不品行や醜聞をひどく嫌うんだよ。よし臍首にはならんにしても、せっかくアソシエートメンバーにまで昇格したのにまた元のアシスタントに返されるかも分らない。……それを思うと、オレは今この瞬間も気が気ではないのだ。不安で不安で堪らん。アメリカ

さ来て、十一年かけてやっと掴んだすべての地位と名誉を、オレは一夜にして失うことになるかも知れんのだ。

野口、ウイスキーを飲み干す。

奥住 今からそのホテルに行ってみましょう。

荒木 ええ、三人で探しましょう。

野口 無駄だよ。さっきまで散々探したが見つからなかった。

目の前に女給仕が立っている。

野口、再びカッとなる。

野口 何だというんだ、まだ五分も経っちゃいないだろ！

彼女は先刻の紙幣を突き返す。

野口 何の真似だ。店主が一分一ドルでは不足だと言ってるのか？ そうい

うことか？ ああ？

女給仕 彼女には何も伝えてないわ。だからこれはあたしの父親の言葉よ。

「金というのは自分の体と頭を使って稼ぐものだ。そして目的を持って気持ちよく使うべきものだ」。

野口 ……。

女給仕 恥つてもんを知らなさい。

野口 ……分かったよ。帰ればいいんだろ。

野口、紙幣を受け取り勘定書きの金額をテーブルに数えて置く。

女給仕 あんた、ロックフェラー研究所のヒデオ・ノグチって人？

野口 (ギクツとする) え……あ、ああ、そうだ。どうして知ってる？ 新聞で見たのかね？

女給仕 名刺を見たのよ。一昨日この店に手帳忘れたでしょ。

彼女はエプロンのポケットから手帳を出して置く。

三人、呆然……。

荒木　　せ、先生、これ。

野口　　う、うん。

奥住　何だ。ここに忘れたんじゃないですか。

野口　ど、どうもそのようだね。

荒木　なーんだ。脅かさないでくださいよ先生。

三人、大いに安堵してへらへら笑いだす。

女給仕、パンパンと手を打つ。

女給仕　早く帰って！

奥住　さあ、行きましょう野口さん。

野口　ああ。（女給仕に）その、ありがとう、何と言ったらいいか。

女給仕　何も言わずに帽子を被って回れ右。

野口　ハハ、とにかくこれは一本取られた。よし諸君、では二軒目に出発だ。
あと十六軒もあるからな。

荒木　　ハイ。

三人、にわかに澁刺として出て行った。

と、野口が戻ってくる。

野口　えーと、さっきの言葉何だっけ、金というものは自分の体と頭を使つて稼いで……？

女給仕　目的を持って気持ちよく使うべきものだ。

野口　（うなずく）立派なお父さんだ。仕事は何を？

女給仕　炭坑夫。

野口　ではロックフェラーのドクター・ノグチからくれぐれもよろしくと伝えてくれたまえ。

女給仕　死んだわ、六年前の落盤事故で。

野口　じゃ……とりあえずお母さんに。ドクター・ノグチがあなたの夫はとも立派な人だったと。おやすみ。

野口、鷹揚な足取りで出て行った。

女給仕は卓上のグラスやカップを片付け始める。
店主のマーサがシェリー酒の瓶とグラスを二つ持って出てくる。

マーサ やつと出てったかい。

女給仕 ええ。

マーサ フン、日本人め。

マーサ、グラスにシェリー酒を注ぐ。

二人は毎晩閉店後にエプロンを外して一杯やるのである。

マーサ さてと。これは祝い酒かい？ それともヤケ酒？

女給仕 どういう意味？

マーサ オーディションが三つもあつたんだろ先週。まだ結果を聞いちゃいないよ。

女給仕 あたしの顔見て分らない？

マーサ ヤケ酒か。そう思ったからいつもより大目に注いどいたんだ。

マーサは煙草ケースを出して彼女にも一本勧め、二人は一服つける。

それから二人、乾杯の仕草でシェリーを飲む。

女給仕、暗い顔でため息をつく。

マーサ メイジー。何も世界の終わりってわけじゃない。オーディションは次のシーズンにもあるさ。

女給仕 これでもう十八ヵ月も舞台に立っていないわ。劇場の楽屋口がどこかも忘れちゃった。もう素人同然よ。

マーサ じゃあどうするのさ。故郷に帰る？

女給仕 ス克蘭トンへ？ あの町に何があるの？

マーサ 知るもんか。小さいけれど温かな家？ 優しい幼馴染？

女給仕 あたしショー・ビジネスの世界で成功したことになってるのよ？ 今さら帰れないわ。

マーサ じゃあ誰かと結婚でもする？

女給仕 ……ねえマーサ、ずっとここで働いては駄目？ そしてあなたが死んだらこの店を譲り受けるの。

マーサ
生憎だがあたしや魔女なんだ。あんたより二百年は長生きするよ。
……。
女給仕
結婚しちまいなよ。あんたの歳ならまだ間に合う。その器量なら相手
マーサ
なんかすぐに見つかるさ。

野口が戻ってくる。

マーサ
また忘れ物かい？

野口
すみません、彼女に何かお礼がしたくて。（女給仕に）その……どう
だろうか、明日の晩ディナーでも。

女給仕
明日の晩も仕事だから。

野口
じゃ仕事が終わってから。日本料理なんかどうだい？ 食べたことあ
る？

女給仕
食べたこともないし、食べたいとも思わないわ。

野口
……。

女給仕
いいのよ。お礼なんて要らないわ。

野口、しばし逡巡……。

野口
その……さつきはすまなかった。失くした手帳が見つからないんです
っと苛々してたんだ。それでつい、あんな無礼な態度を。

女給仕
そう。

野口
本当にすまなかった。……じゃ、おやすみ。

野口、消沈して行きかける。

女給仕
東十四丁目のラチョウス・レストランならいいわ。ドイツ料理の店。

知り合いがピアノを弾いてるの。

野口
本当？

女給仕
ええ。明日のこの時間に迎えに来て。

野口
分かった。……あ、名前を聞いてなかったね。

女給仕
メリー・ロレッタ・ダージス。……メイジーでいいわ。皆そう呼ぶか
ら。

野口
わかった。メイジー……いい名前だね。じゃ、おやすみ。また明日。

メリー　おやすみなさい。

野口、嬉しそうに出て行った。

マーサ　あれはやめた方がいいね。

メリー　そう？

マーサ　ジャップじゃないのさ。

メリー　……あたしは気にしないわ。

マーサ、肩をすぼめる。

音楽とともに……溶暗。

奥住、客席に向かい立つ……。

奥住

その翌年の明治四十五年、即ち大正元年の四月、博士は密かに結婚いたしました。お相手のメリー・ロレッタ・ダージスというアメリカ人女性については残念ながらあまり多くのことは知られておりません。

わずかに伝えられていることといえば、ペンシルバニア州スクラントンの出身で父親は炭坑で働くアイルランド移民であったこと、劇場に関わる仕事をしていたらしいこと、お酒が好きで、夫婦喧嘩をしても野口さんより力が強かったらしいということくらいです。お二人の新居はマンハッタン・アベニュー一番地のアパートメントでしたが、その向かい側の部屋には偶然にも日本人が住んでいました。写真家にして画家でもあった堀市郎さんという方です。

堀市郎がトランク片手に通りかかる。

堀

そうねえ。奥さんはあまり自分のことは話さない人でしたけど、少なくとも野口さんの研究に対して理解とか協力とかいったことが出来るような人ではなかったですなあ。アイリス系ですから、のぼせると後先見ずといったふうになる人でね。でもまあ貧乏も平気みたいでしたし、さっぱりして温かみのあるいい人でしたよ。……あ、申し訳ないけどこれから友人の山荘に出かけるところなのでこれにて失敬。

堀、退場する。

奥住

一方で仕事の方はこの頃からますます有卦^{うけ}に入るといった様相を呈してまいります。梅毒病原体の純粹培養に続いて、翌大正二年には麻痺性痴呆症と脊髓癆の患者の脳からスピロヘータを発見、さらに小児麻痺の病原体発見、狂犬病の病原体発見と矢継ぎ早に新発見を繰り返して、一躍世界の医学界の寵児とされます。ノーベル賞の有力な候補となったり、華々しい一時帰国をなされたのもこの頃の数年間のことです。……しかし好事魔多し。そのお疲れからか、大正六年には腸チフスに罹患^りされます。これが一時は命の危険さえ危ぶまれる重篤な病勢となりまして、この入院生活による研究の断絶は一年近くにも及びました。野口博士数えて四十二のまさに厄年の大患でありました。そして……大正七年の春となります。

奥住の姿も消える……と、舞台は変わっている。